

森のふくろうへの独言

「翡翠の歎き」から

小田富英

届くか

わが無音の独言

聴けるか 翁の再生の詩^{うた}

翡翠と呼ばれた鳥に対する

一方的な仕打ちに

翁の反応は

あるときに強く

すぐあとに弱さをみせる

なぜか理解が追いつかないほど

ジレンマを楽しむ

論争マニアのよう

翁の言葉は

世が乱世ならば微温

後退すればラジカルと言ったのは

誰だったか

忘れたけれど

あのころから

この言葉が

ひとり歩いていくのを今も見せつけられている

翡翠の黒い嘴に

紅い小魚が垂れているのを

一幅の絵画として認めるのか

遙か遠い金魚の里から

何千何万の小さな命の代表として

やっと迎え入れた村莊の池で

一瞬のうちに消えてしまうのを悲しむのか

人はどちらかの立場に立たねばならぬのか

翁は言う

紅い小魚の命の方が重ければ

いかに翡翠と呼ばれようとも

この鳥の歎きははかりしれないと

平和とは山林に生き残ったものの間だけの

差し引き勘定ではないはずだ

翁も答えが出せない時代に私達は

山林の生き物たちと歩んでいかなばならぬ



角
TUNO

詩誌

第66号